

19世紀における『新・世界図絵』に関する一考察

井ノ口 淳 三

A Study of the “*New orbis sensualium pictus*” in the 19th Century

Junzo INOKUCHI

Abstract

The book “*Orbis sensualium pictus (the Visible World by the Senses)*” by John Amos Comenius (1592~1670) was printed in Nuremberg in the year 1658. It is well known as the first textbook with many illustrations in the world. Therefore there are about more than 260 revised editions after the first publication. The purpose of this paper is to consider about the character of the book “*New orbis sensualium pictus*” in the 19th century. It was written by Jacob Eberhard Gailer (1792~1850), who was the teacher of the gymnasium in Tübingen. He wrote some books with illustrations for the young. Hubert Gobels, who published the reprint of “*New orbis sensualium pictus*” in 1979, said that it was beyond the limit of the textbook, and that Gailer made the light reading for leisure. But I think that it is the textbook in 19th century, after looking through the books, which were published in 1832, 1833, 1835, 1838 and 1842. Because they were changed, whenever they were published, and they were revived some figures in the illustrations. The fact shows us the character of this book as the textbook.

Key words : Comenius, *Orbis sensualium pictus*, Gailer, *New orbis sensualium pictus*, Textbook

1. はじめに

コメニウス (Comenius, チェコ語名 Jan Amos Komenský 1592~1670) の『世界図絵』 (*Orbis sensualium pictus*, 1658) は、「世界で最初の挿絵入り教科書」として多くの人々に親しまれ、著者の死後も毎年のように版を重ねた。その中には、『世界図絵』の形式のみを踏襲してはいるものの、内容は初版本とまったく異なるものがある。筆者は、このタイプを、たとえば『新・世界図絵』とでも呼ぶことにして、コメニウス自身による『世界図絵』と区別すべきであると考え。それらの『新・世界図絵』の中で最初に出版されたのは、1719年の著作であるが¹⁾、本稿では19世紀に出版された一連の著作を検討の対象とする。初版と同じ形式の教科書が200年以上もの長い間実際に使用された例は『世界図絵』以外に見当たらず、それは教科書の歴史においてまことに貴重な資料といえる。これらの異版本の内容について、その構成や文章、挿絵等を分析することを通して、それぞれの時代における教育的な関心の所在を知ることができる。どのような教育内容が選択されているかを見れば、教科書に何が求められているのかを理解することも可能になる。そのような作業を積み重ねて、教科書が果たしてきた役割について考察することにしたい。

さて本稿で検討の対象とする著作は、1832年にドイツのロイトリンゲン (Reutlingen) で出版された『青少年のための新・世界図絵』 (“*Neuer ORBIS PICTUS für die Jugend*”, 1832) である。それはチュービンゲン (Tübingen) の教師ガイラー (Jacob Eberhard Gailer, 1792~1850) の手になるもので、全316章 2巻本の大作である²⁾。これは、その後1833年³⁾、1835年⁴⁾、1838年⁵⁾、1842年⁶⁾ と数年おきに版を重ねた。これほど短期間に繰り返し出版されたにもかかわらず、これらはコメニウス自身の著作ではないという理由から、世界のコメニウス研究者の関心を惹くことはなく、これまで一連の『新・世界図絵』が彼らによって紹介されることもなかったのである。しかし、これらの著作を丁寧に見ていくと、後の版では英語訳やイタリア語訳が次々に追加されたり、文章や挿絵にも変化が見られたりするなどの興味深い事実が生じていることがわかる。そこで本稿では、まず1832年版の特徴について検討し、次に後の版との異同を指摘して、これらの変化の理由を考察するものである。

2. 『新・世界図絵』1832年版の特徴

はじめに著者のガイラーとは、どのような人物であったのか、1979年復刻版の巻末に付された解説に依拠して紹介する。復刻版を編集したゲーベルス (Hubert Göbels) によれば、ガイラーは、あまり知られていない人物だという。ガイラーは、ロイトリンゲンの指物師の息子として1792年1月10日に生まれた。まったく偶然のことだが、コメニウスの誕生後ちょうど200年後に生まれたことになる。彼は1822年からチュービンゲンで教師になったが、1841年には酩酊のため

休職となり、貧しくなったので、家族と桶作りもした。1842年に再び教師として活動し、新聞や週刊誌に寄稿した。1844年からは、以前に住んだことのあるナゴルトで暮らした。1836年に彼は、『新しい寓話。すなわち36枚の銅版画付きで、青少年のためにドイツ語、ラテン語、フランス語、英語で書かれた、寓話の世界から最も美しいものを選びすぐったもの（“*Neues Fabelbuch. Auswahl des Schönsten aus der Fabelwelt, in deutscher, lateinischer, französischer und englischer Sprache, für die Jugend bearbeitet mit 36 Kupfern*”）』を執筆した。1839年には、『青少年のための不思議な本（“*Wunderbuch für die reifere Jugend*”）』を「自然と技術のもっとも不思議で興味深い活動を物語と絵で示すギャラリー（*Galerie der merkwürdigsten und interessantesten Werke der Natur und in Erzählungen und Bildern*）」として出版した。⁷⁾

ゲーベルスによる以上の紹介もドイツの児童文学史や児童文学事典などを参考にして書かれている様子であり、ガイスラーに関しては、これ以上のことはわからない。いずれにせよガイスラーは1832年に『新・世界図絵』を刊行した後も、青少年向きに挿絵入りの書物を出版し続けたようである。それは、『新・世界図絵』が、1833年、1835年、1838年、1842年と続けて増刷され、世間から好意的に受け入れられた事実と関係のあったことを推測させるのである。

それでは次にこの『新・世界図絵』が、コメニウスの『世界図絵』と比較してどのような特徴を備えたものであったのか、その構成、内容、文章、挿絵等について順に検討していくことにする。

まず全体の構成についてであるが、『世界図絵』が150章から成るのに対して、『新・世界図絵』は、316章と2倍以上に増加している（別掲の目次を参照されたい）。量的な相違だけではなく、章の並べ方にも変化が見られる。もともとコメニウスの著作では、章の順序に細心の注意が払われており、関連する事項を結びつけて学ぶ工夫がなされていた。⁸⁾ つまりそれは、汎知を教育内容として理解するという性格をも備えた書物であった。これに対して『新・世界図絵』の場合、章の順序には一貫した方針が希薄である。それでも前半部は、コメニウスの著作を踏襲しているかに見える。すなわち、「火」「水」「大地」などから始まり、植物、昆虫、鳥、動物と進み、人間に続く。そしてさまざまな職業についての説明が続く。ところが、その間に都市や王国、戦争や犯罪者の処刑が挿入されている。また、123章に「料理（*Das Kochwerk*）」の説明があるにもかかわらず、217章以下にも「料理人（*Der Koch*）」の説明がなされている。さらに、138章以下で船の種類の説明があるのに、287章に蒸気船が登場する。208章で「鏡づくり」があるのに、288章でも「鏡と眼鏡」の説明がなされている。さらに283章で「火事と洪水」、284章で「雷と地震」が登場しているが、これらは最初の方の「火」「水」「大地」等の説明に続けた方が自然である。つまり、『新・世界図絵』では関連するものが結びつけられずに離れた章として構成されているのである。後半部になると、学問分野、宗教、倫理、遊びというコメニウスの著作と同様の項目についての説明が見られるのだが、その順序は入り混じっている。最後の箇所では、思いつくままに並べたのではないかという印象を受けるほど、その順序の必然性を理解しがたい並べ方

になっている。ヨーロッパ各地の名物や名所の間に「煙突掃除人」の章が挟まっていたり、「幾何学と建築学」が思い出したように追加されたり、「鍛冶屋」や「じゅうたん製造」などの職業が最後になって再び5種類も並べられている。このように『新・世界図絵』においては、章を構成する方針や基準が何に基づいているのかわかりにくいものになっている。

次に内容について検討する。章の分量が、コメニウスの著作に比べて2倍以上に増加したことはすでに指摘した。たとえば「異国の植物」が5つの章において詳しく説明されているし、昆虫、鳥、動物などもそれぞれ章が増加している。『世界図絵』のどの異版本にも見られる「学校」だけでなく、「大学」の章も設けている。また、職業についても「帽子づくり」や「製材」「タバコ製造」などいろいろな職種が追加され、相当詳しく説明されている。その数は100を越えており、全体のおよそ三分之一を占めている。それは「職人尽くし」を想起させるほどである。⁹⁾ コメニウスの時代には存在しなかった「296. 鉄道と蒸気機関車」や「303. 電報」などの章もあるので、17世紀よりも19世紀の著作の内容が増大しているのは当然と言えよう。

しかし逆に削除された章もある。それは「神」である。このことは復刻版を編集したヒューベルト・ゲーベルスも解説の中で指摘している。すなわち、コメニウスは、神を中心とする世界理解を示した。その結果彼は、冒頭で「自ら永遠の中にある」と定義した神を、すべての章に基礎づけた。これに対してガイラーは、「神」の章を省き、提示可能な現実である「世界」の章から始めた。神に従う彼の示唆は、表題に直結した象徴である詩の中に存在する。「自然の書物を読みなさい。それはあなたに神の足跡を示します。そして世界があなたに提供するものを示します。吟味して正確に考察しなさい」。¹⁰⁾ つまり、ガイラーは、「神」の章を省略したが、神を軽視したわけではなく、「世界」の章の中で、神の提示したものを説明しているのである。それにしても「神」で始まり、「神の摂理」と「最後の審判」で終わるコメニウスの著作に比べると、それらの省かれた『新・世界図絵』からは、世俗的な印象を強く受けることは否めないのである。『新・世界図絵』の最終章は、「316. 死と埋葬」であるが、これは信仰する神を異にする誰にとってもわかりやすい終結だと言える。

コメニウスの著作に記述があって、『新・世界図絵』には省略されている章には、この他に「変形と異常発育の人」がある。これには後者における身体障害への配慮を推察することができる。

『新・世界図絵』では、章の数が2倍以上に増加しているばかりではなく、それぞれの章の説明もコメニウスの著作より詳しくなっている。本稿では、どの異版本にも含まれている「学校」の章に関する説明を紹介する。

「237. 学校

個人の、そして国家全体の幸福は、青少年の最初の教育しだいなのです。

それゆえ公立の学校が設立されました。そこでは若人の心がすべての事柄を教えられ、徳へと導かれます。

学校は、クラスに分けられています。

教師はいすにこしをかけ、生徒は長いすにすわります。教師は教え、生徒は学ぶのです。ある事柄がチョークで黒板に書いて示されます。

二、三の生徒は教卓のそばにすわり、書き方をします。教師はまちがいを正します。またある生徒は起立して、教えられたことを暗唱します。

別の生徒はおしゃべりをし、その上ふざけて不真面目です。これらの生徒はしかられ、罰せられます。

実科学校では言葉だけではなく、芸術や科学も教えられます。すなわち、算数、幾何、正書法、母国語、地理、歴史、博物学、技術、物理、フランス語など。

勉学を続けようとする生徒は、ラテン語学校へ進みます。そしてラテン語だけではなく、ギリシャ語やヘブライ語も学びます。

普通の学校では、生徒はキリスト教の原理、母国語の規則、算数、正書法、さらに歴史や博物学、地理の最も重要な事柄を教えられます」¹¹⁾

この「学校」の章の途中までは、コメニウスの著作とまったく同じ文章である。しかし「実科学校」以下の記述は、『新・世界図絵』で初めてなされたものである。この「学校」の章はむしろ相違の少ない方であり、共通する表題を持つ章のほとんどは、後者において詳しい記述がなされている。これについて二つの著作の内容の相違を説明するために唯一「学校」の章のみを比較対照したヒューベルト・ゲーベルスは、次のように述べている。すなわち、『新・世界図絵』における学校系統の説明の追加は、時代の推移によるものであること、また、ギムナジウムの教師であるガイラーにとって『新・世界図絵』は、教材を豊かに備えた進歩的な教科書であったこと、さらにコメニウスの時代に比べて、多くの職業や「貨物船」「汽船」「鉄道と蒸気機関車」「釣鐘式潜水器」「電動機械」などにおいて技術革新がなされていること、異国の風物の説明が見られることなどを挙げ、これらのことから相違を生ぜしめたと述べている。ゲーベルスによれば、このように内容を広げたガイラーの『新・世界図絵』は、教科書の枠を破るものであり、ガイラーは、「余暇の読み物 (die Freizeitlektüre) を作った」と言うのである。¹²⁾

上記のゲーベルスの見解に同意するかどうかは、ガイラーの著作をもう少し分析してから考えることにして、『新・世界図絵』で追加されている多くの章の中から異版本としては珍しい「大学」の記述を見ておこう。教育に関係する事柄が当時どのように説明されていたかを知ることも教科書の役割を考える上で参考になるからである。

「238. 大学

大学は、大変古い起源を持っており、実際学問と学芸の中心地です。

もし人が勉学を志し、言葉と科学の基礎を下級学校やギムナジウムで積むなら、学生になり、何か一つ科学を徹底的にものにするために大学へ行くのが良いでしょう。

これらの大学のそれぞれは、いくつかの学部を有し、最も重要な学部は、神学、法学、医学および哲学です。

これらの学部の構成員は、普通の公立の教師であり、大学の講義室で講義を行います。この他に特命の教授がおり、彼らは講義をするのに特別の同意を必要とします。これを入手するために、彼らは前もって試験に合格しなければなりません。その能力を論文によって公の試験で示さなければなりません。学生は、講義のために一定の授業料を免除されます。到着すると同時に彼らは、大学の係りの者を通して学長に通知し、出席簿に記入しなければなりません。

大学は、学問をする人々の共同体なのです」。¹³⁾

以上の説明は、19世紀前半の大学の描写である。この記述はどのような読者層を想定して書かれたものであろうか。当然これから大学への進学をめざす青少年であり、ガイラーは自分の担当する生徒達も意識していたものと思われる。

『新・世界図絵』を検討する際に、著者のガイラーが教師であったという事実を軽視することはできない。その意味で「270. 子どもの遊び」と「259. 勤勉」の二つの章も見ておきたい。

「270. 子どもの遊び

人間の心は、響き始めると共に活動を始めます。

この傾向は、幼少の頃から身についており、日々増大します。

しかし、少年時代に特にふさわしいが、役には立たないゲームや活動ほど少年少女を楽しませるものではありません。

少年は少女とは異なった遊びを好みます。少女は家庭で母親がすることを真似します。

少年は木馬に乗り、右や左に方向を変えて遊びます。他の者は太鼓やラッパや武器を手にします。

少年はビー玉遊び、九柱戯のピンへのボール投げ、輪回し、吹き矢、横木の飛び越え、竹馬、シーソー、ボール遊びなどをします。

私たちは、気晴らしや娯楽のためのゲームが人を楽しませることを経験から知っています。

両親や保護者は子どもに合わせて、遊びの中で良いものを与え、悪いものを除きます。

少女は人形に服を着せたり、テーブルや台所用具のある小さな台所で遊んだりするのが大変好きです。」¹⁴⁾

「260. 勤勉

勤勉は労働を愛し、怠けることを避けます。

勤勉は常にアリのように働き、すべての事物のたくわえを運び集めます。

結局欠乏や貧しさに苦しめられる怠け者やキリギリスのように、いつもブラブラしているようなことはありません。

やりかけたことは最後までずっと熱心に追及します。翌日まで何も引き延ばさず、明日明日(cras cras)とくりかえすカラスの歌をうたいません。

仕事が一段落したら休みます。しかし休んでも、ぶらぶらすることにかまけないように、再び仕事に戻ります。

勤勉な生徒は、いろいろな花から蜂蜜を自分たちの巣の中へ集める蜜蜂に似ています。

怠け者は、結局物もらいになります。』¹⁵⁾

これら二つの章の挿絵は、コメニウスの作品の意匠を踏襲しているものの、文章の異同という点では対照的である。前者つまり「子どもの遊び」の文章は、コメニウスの著作とかなり異なるが、後者「勤勉」の方は、ほとんど同じである。コメニウスの著作では、もっぱら少年の遊びのみが描かれていたのに対して、ガイラーの『新・世界図絵』では、少女の遊びや保護者の接し方にも触れられている。この視野の広がりや、教師という職業から生じたものか、それとも親の立場によるものかはわからない。いずれにせよ、それぞれの時代の子どもに人気のあった遊びが紹介されていることは間違いない。

他方「勤勉」の章では、「怠け者は、結局物もらいになります」という末尾の1行を除くとまったく同一と言って良い。このように最後に教訓めいた文章をつけ加える事例は18世紀にも先例があり、その変化をガイラーが教師だったことと結びつけるのは早計である。¹⁶⁾「学校」の章でも見たように、ガイラーの『新・世界図絵』では、コメニウスの著作に文章が追加されている場合が少なくない。徳育的な内容に限らず、詳しい説明を好む性向こそ教師としてのガイラーに付随するものではなかつたらうか。

以上見てきたように、『新・世界図絵』では、新たな章（「238. 大学」）が追加されたばかりではなく、コメニウスの著作と同じ題名の章でも書き変えられたり（「270. 子どもの遊び」）、説明を挿入されたり（「237. 学校」や「259. 勤勉」）していることがわかるのである。

次に『新・世界図絵』の挿絵について見ていく。『新・世界図絵』の挿絵には、コメニウスの著作に比べて、次のような変化が見られる。

- ①コメニウスの作品は木版画であるが、ガイラーの作品は銅版画である。したがって細部の詳しい描写も可能である。
 - ②コメニウスの作品の特徴であった挿絵の中の数字が、全体のおよそ五分の一にあたる前半の60章ほどにとどまっている。
 - ③コメニウスの作品では挿絵が文章に対応しているが、ガイラーの作品では挿絵は文章の一部のみを描写している。
 - ④コメニウスの作品と同じ題名の章でも、ほとんどの場合新しい挿絵が用いられている。
- 以上の変化について順に見ていこう。

①ゲーベルスによれば、「古風 (altmodisch)」とされる『新・世界図絵』の挿絵だが、銅版画の特質を生かして細かな描写がなされている。とりわけ植物、昆虫、動物、鳥などがリアルに描かれている。また、『新・世界図絵』では、一つの章の中で複数の職業を説明しているものが幾つもあり、それらの章では挿絵も2枚ないし3枚に分割されている。そのため1枚のサイズが小

さくなっているのだけれども、それほど見にくい印象を受けない。これも銅版画を用いた効果と言えよう。

なお、挿絵の掲載されているページの用紙は文章のみのページにくらべると心持ち厚めの紙質のものが用いられており、片面のみ印刷されている。これはコメニウスの作品ではすべてのページが両面に印刷されていたのと異なっている。

②コメニウスの『世界図絵』は、単に挿絵を用いただけではなく、それが文章中の言葉と対応しており、挿絵の助けを借りて言葉と事物の学習を並行して進めることができることに大きな特徴があった。したがって挿絵の中に数字を記入しないことには教科書としての意味は半減するのである。ところが、異版本の中には数字のないタイプのもがあり、ガイラーの『新・世界図絵』も挿絵だけを添えたこの種類に分類される。このタイプのもは、通常すべての挿絵に数字を記入していないのだが、『新・世界図絵』ではなぜか一部の章にだけ数字が付与されている。そこで数字の付された文章から一部を抜粋して紹介する。

「77. 人体の内部（続き）

横隔膜は、腸のある胴を上と下の二つの部分に分けます。

上部には心膜に囲まれている心臓1)と肺2)があります。

(中略)

腹部または下部には、胃3)、腸4)、肝臓5)、脾臓6)、両方の腎臓7)および腸間膜があります。

(以下略)。

なぜ一部の章にだけ挿絵中の数字と文章中の数字とが対応しているのか、その理由は不明である。この前の「76. 人体の内部」や後の「78. 骨」「79. 頭」にも挿絵には数字が付与されているが、文章には数字の記入はない。挿絵の中に数字のあるのは、前半の約60の章だけである。

③『新・世界図絵』の大多数の挿絵に数字がつけられていないのはなぜか。それはこの著作では挿絵と文章とを対応させようとする意識が希薄であることと関係があるように思われる。たとえば、すでに触れた「237.学校」、「259. 勤勉」そして「270. 子どもの遊び」などの章は、いずれも、コメニウスの著作と同じ題名の章であったが、文章は異なっていた。けれども挿絵は、新しく作られたものが多い『新・世界図絵』の中では、元の『世界図絵』と比較的類似した意匠が用いられている(図版参照)。文章に忠実な挿絵が描かれていたコメニウスの作品と比較して、挿絵が似ているのに文章が異なるということは、『新・世界図絵』の場合、挿絵が文章の一部しか反映していないことを意味するのである。「270. 子どもの遊び」の場合、文章では女の子の遊びが追加されているが、挿絵には男の子の遊びしか描かれていないままである。これを意に介しないでいられるのは、挿絵と文章に数字を付与してそれぞれを対応させるという手法にそれほど大きな意味を見出していないからである。ここから19世紀において『新・世界図絵』が言葉と事物を学ぶ教科書として実際のところどのように活用されたのか、という新たな疑問が生じる。ま

た、一部の章の挿絵と文章にだけ数字が付与されて対応しているのはなぜかという疑問も残されたままである。

教科書の挿絵に数字がある場合には、親や教師はどうしてもそれと対応している言葉を教えようとする意識が強くなりがちである。また、親や教師の助けを借りずにこの書物を手にした場合、挿絵中の数字は子どもの理解を助ける機能を持つ。いずれにしても数字は学習という要素を強める作用を持つ。コメニウスの場合、『世界図絵』は、まさに教科書として活用されるべきものであった。他方ガイラーの『新・世界図絵』は、教師によって作成されたものとはいえ、「読み物」として楽しめる内容が多い。特に後半部の章はそうである。ここに『新・世界図絵』の特徴の一つを認めることができるのである。

3. 『新・世界図絵』1835年版の特徴

これまでガイラーが『新・世界図絵』を最初に作成した1832年版の特徴を見てきたが、今度は1835年版を検討することにしよう。この版は以下に示すように、1832年版とは異なる特徴を持っており、増刷というよりも増補改訂版と言うべきものである。最初に主な変化を箇条的に記してみる。¹⁷⁾

- ①1832年版が、ラテン語、ドイツ語、フランス語の3カ国語対訳版であるのに対して、1835年版には英語訳も加わり、4カ国語版となっている。
- ②1835年版では、ラテン語とドイツ語の文章にだけ文節ごとに文頭に通し番号が付けられている。
- ③1832年版の「304. 馬上試合」と「305. 隠遁者」との間に、1835年版では「305. 電動機械」、「306. 空気ポンプ」、「307. 羅針盤」、「308. 風車」という四つの章が挿入され、全部で320章に増加している。
- ④1832年版の316章の挿絵中247の章は、1835年版でも同じ挿絵が用いられているが、全体の20%を越える69の章で別の挿絵に変更されている。
- ⑤その他細かな違いが見られる。

以上の変化について順に見ていこう。

①『新・世界図絵』は、ドイツ人によってドイツで出版された。したがってドイツ語が主要な言語である。序文もドイツ語のみで書かれている。章の題名はドイツ語が最も大きな文字で中央に記されている。しかし、本文は、ラテン語、ドイツ語、フランス語の順に並べられている。おそらくこれはコメニウスの著作の様式を踏襲したものであろう。もちろん対訳にしておけばラテン語やフランス語の教科書としても実際に活用することが可能となる。そして1832年版の評判が良かったので、1835年版では英語訳を増補して出版することになったのであろう。1835年版でも章の題名はドイツ語が最も大きな文字で中央に記されている。しかし本文は、英語、ドイツ語、

フランス語の順に並行して記され、それらの文章が終わった下の欄にラテン語の文章がまとめて置かれている。つまり1832年版のラテン語の位置に英語が置かれるようになったのである。すでに②で示したように、1835年版ではラテン語とドイツ語の文章にだけ文節ごとに文頭に通し番号が付けられているのだが、おそらくこれは、ドイツ語とラテン語の文章が離れた位置に置かれるようになったため、両者の対応関係をわかりやすくするために工夫したものと思われる。

②については、①とあわせて説明したので、次に③について検討する。

③1832年版の「304. 馬上試合」と「305. 隠遁者」との間に、1835年版では「305. 電動機械」、「306. 空気ポンプ」、「307. 羅針盤」、「308. 風車」という四つの章が挿入され、全部で320章に増加している。これらの章が追加された理由は不明だが、そこで取り上げられている事項は、いずれもメカニク的な機能を伴うものであるという共通点を持っている。もしこれらを挿入するならば、「296. 鉄道と蒸気機関車」と「297. 釣鐘式潜水器」との間が妥当であろうが、『新・世界図絵』ではもともと関連する内容の章をまとめるという意識が希薄であるので、このような位置に挟まれることになったのであろう。

④変更された理由は不明であるが、1832年版と1835年版の挿絵を比べてみると、後者の方がいっそうリアルな表現に変化しているように思われる。この点については図版を参照されたい。

⑤その他については、本来「143章」とすべきところを1835年版では「141章」と誤っていることや、「267章」の挿絵が欠落していることなどであり、これらはいずれも単純なミスであると思われる。

4. 『新・世界図絵』1838年版および1842年版の特徴

『新・世界図絵』の1838年版では、冒頭にこれまでの各版の序文を再掲した後、新たな序文を記載している。ここで簡単にそれらの内容を紹介すると、まず1832年版の序文では、コメニウスの『世界図絵』の意義について説明した後、それが30年戦争の時代に書かれたものであり、ガイラーは、「本全体を当代の要求に応じて作り変えようと企画した」と記している。また、事物を学ぶとともにラテン語やフランス語の学習用の教科書であることも意識されており、全体の構成もコメニウスの『世界図絵』におおむね準じたものとしているが、「多くの新しいラテン語が選択されねばならなかった」と記している。

次に1833年版の序文では、「羅針盤、風車、空気ポンプおよび電動機械という新しい4つの章を追加した」ことや、「60枚もの挿絵を作り変えたが、価格は据え置きにした」ことを記し、英語訳の構想にも触れている。

さらに1835年版の序文では、「新版は、英語訳によって特に識別される」と記し、このことを最大の特徴としている。

そして肝心の1838年版の序文であるが、これ以前の序文がいずれも3～4ページであったのに

対してわずかに3行しかない。そしてその内容は、「第3版の急速な流布によって、新たな版が必要となった。それがこの第4版であり、まったく変化はない」と記されている。たしかに1838年版には、1835年版と比べて特徴的な変化は見られず、この版だけは「改訂版」というよりも「増刷」という性格を持っている。

挿絵の中の数字も、「13. 果樹」から「79. 頭」までの植物や鳥や動物の章を中心に60を越える章で記載されている。なぜこれに注目するのかと言えば、本文中の言葉と挿絵を同一の数字で対応させることによって、『新・世界図絵』が単なる「余暇の読み物」ではなく、教科書としての性格を強めるものになることを意味するからである。本文中の言葉を選びそれを挿絵と同一の数字で対応させるというこの作業は面倒なことであり、ガイラーは相当の時間を費やしたはずである。このことについて4回の序文のいずれにもまったく触れられていないが、その理由は不明である。ガイラーにとってはそれほど重要なことではなかったのであろうか。

最後に1842年版についてであるが、この版の序文もわずか7行しかなく、それは1838年版の3行に次いで短いものである。その中で「イタリア語訳も添えられた」と記しているのが注目される。つまりこの版からは、イタリア語訳も追加され、5カ国語版になっているのである。配置の仕方は、英語、ドイツ語、フランスが並列に置かれ、それらの文末にラテン語とイタリア語が並置されているという並べ方である。そして挿絵の中に数字が付されていることは、1838年版と同様である。その他に大きな変化は見られない。序文が執筆された地名も1835年版まではチュービンゲンであったが、1838年版からはロイトリンゲンに変更されており、それはこの1842年版でも踏襲されている。

5. おわりに

以上見てきたように、ガイラーの『新・世界図絵』は、1832年から1842年までの10年間に5回にわたり出版された。そしてその都度前の版とは異なる変化が施されていた。それを一覧表の形に整理したのが、末尾の表である。増刷の機会に改訂したのか、それとも改訂の必要があって増刷したのか、そのあたりの事情は不明だが、いずれにせよ1838年版以外は増刷のたびに何らかの改訂がなされたという事実が重要である。なぜならその改訂の方向をたどれば、この『新・世界図絵』の性格が読み取れるからである。

すでに第2節でも紹介したように、『新・世界図絵』の1835年版を1979年に復刻したゲーベラーは、本書をギムナジウムの教師ガイラーによって作成された青少年向けの「余暇の読み物」とであると評価した。たしかに後半の部分は、当時の青少年にとって興味深いテーマであっただろう。しかし筆者は、本書を200年近くも前に出版されたコメニウスの『世界図絵』に範を得て作成された、19世紀における「教科書」とであると判断する。その理由の一つは、『新・世界図絵』が改訂されるにつれて翻訳される言語が増加していることである。『世界図絵』の場合も4カ国語版

や5カ国語版が存在したが、それらが実際どのような必要から作成され、どのような形で使用されていたのかについては意外にわからないことが多く、今日においても仮説のままに留まっている。しかし、しだいに言語が増加する『新・世界図絵』の様子から推察すると、それらは同時に複数の言語を学習するためばかりではなく、一つの外国語を個別に学ぶためでもあったと考えられるのである。その場合、1冊で数カ国語を収録した方が、言語ごとに別々の版を出すよりも安くなったと思われる。価格を抑えることは、特に青少年向きの本の場合には必要な措置であった。

『新・世界図絵』を「教科書」と判断する今一つの理由は、本文中の言葉と挿絵とを同一の数字で対応させるという形式が、部分的にせよ採用されていることである。これこそコメニウスが事物と言葉とを並行して学ばせようとして創案した工夫に他ならない。ガイラー自身はこのことには何も触れていないのだが、特に植物や鳥や動物を主題にした章を中心にしてこの措置がとられていることから、ガイラーはこれらの名称を青少年に理解してほしかったのではないかと推察する。

さて本稿では、1833年版を序文以外は未見の状態で執筆したのであるが、以上に見てきたような改訂の方向性は、大筋で間違っていないと考える。今後1833年版を詳細に検討することによって、さらに確実な事実に基づいて論じることになりたい。

注

- 1) 井ノ口淳三『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、1998年、187ページ。
- 2) 追手門学院大学所蔵。
- 3) 1833年版は、脱稿後に入手した。追手門学院大学所蔵。
- 4) 追手門学院大学所蔵。1979年にドルトムントで出版された復刻版を、大阪市立大学、信州大学、東京大学、武蔵大学が所蔵している。
- 5) 広島大学所蔵。
- 6) 芦屋大学所蔵。
- 7) Nachwort von Hubert Göbels in “*Neuer Orbis pictus für die Jugend*” 1979, S.1050.
- 8) 往来物研究者の小泉吉永も、コメニウスの『世界図絵』と中村惕齋の『訓蒙図彙』（1666年）とを比較して次のように述べている。「コメニウスは、海と生物のまとまりを現在の言葉でいえば、“生態系”という世界観を通して教えようとしています。具体的な魚の名前や語彙にはあんまり重点をおいていません」。小泉吉永「^{うおじづくし}“魚字尽”は江戸の初等教科書」『漁協の共済』2004年6月。
- 9) たとえば、ヤン・ライケン・小林頼子訳著、小林みゆき訳『西洋職人図集』八坂書房、2001年。
- 10) Göbels, *op. cit.*, S.1051.
- 11) “*Neuer Orbis pictus für die Jugend*” 1832, S.415.

- 12) Göbels, *op. cit.*, S.1053.
- 13) “*Neuer Orbis pictus für die Jugend*” 1832, S.417.
- 14) Ebenda. S.469.
- 15) Ebenda. S.452.
- 16) 井ノ口淳三, 前掲書, 194ページ以下を参照されたい。
- 17) 1833年版を脱稿後に入手し, この版から「電動機械」, 「空気ポンプ」, 「羅針盤」, 「風車」の4つの章が追加され, 全部で320章となったことや, 挿絵が変化したことを確認した。

本稿は, 2002(平成14)年度から2004(平成16)年度にわたり, 文部科学省・日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究C(2) 課題番号14510314)の助成を受けて行われた研究成果の一部である。本稿で使用した追手門学院大学所蔵の文献も, この助成によって購入したものである。

『新・世界図絵』1832年版の目次

序文	34. 貝、サンゴ	69. げっ歯類 (続き)
入門	35. 昆虫、カブト虫	70. 奇妙な体の四足動物
1. 世界	36. バッタ、セミ	71. 類人猿
2. 天空	37. 蝶々	72. 類人猿 (続き)
3. 火	38. 蝶々 (続き)	73. 人間
4. 空気	39. トンボ、蜂	74. 人間の七つの年齢段階
5. 水	40. 羽のない昆虫、クモ	75. 人間の身体
6. 雲	41. 軟骨魚類	76. 人体の内部
7. 大地	42. 硬骨魚類	77. 人体の内部 (続き)
8. 大地の表面	43. 両生類	78. 骨
9. 鉱物	44. 四足の両生類	79. 頭
10. 鉱物 (続き)	45. 爬虫類、ヘビ	80. 頭 (続き)
11. 花とその部分	46. ヘビ (続き)	81. 春
12. 樹木とその部分	47. 猛禽類	82. 夏
13. 果樹	48. くちばしの小さな鳥	83. 秋
14. 広葉樹	49. 啼鳥、カラス	84. 冬
15. 針葉樹	50. 啼鳥、カラス (続き)	85. 村
16. 椰子類	51. 啼鳥 (続き)	86. 農業
17. 灌木	52. 家禽 (鳩、鶏)	87. 牧畜
18. 灌木 (続き)	53. 家禽 (クジャク)	88. 牧羊
19. 灌木 (続き)	54. ダチョウ	89. 園芸
20. 灌木 (続き)	55. 沼地の鳥	90. 漁獲
21. 異国の植物	56. 水鳥	91. 狩猟
22. 異国の植物 (続き)	57. 鯨	92. 捕鳥
23. 異国の植物 (続き)	58. 水かきのある哺乳類	93. バターとチーズ作り
24. 異国の植物 (続き)	59. 大きな哺乳類	94. 蜂蜜製造
25. 異国の植物 (続き)	60. 有蹄類	95. 収穫
26. 庭園の植物	61. 有蹄類 (羊)	96. 干草の収穫
27. 穀物と草	62. 有蹄類 (牛)	97. ぶどう栽培
28. 薬草	63. 有蹄類 (鹿)	98. ぶどうの収穫
29. 芳香植物、香辛料植物	64. 有蹄類 (馬)	99. 果樹園
30. 毒草	65. 野獣	100. 造園師
31. 花	66. 野獣 (続き)	101. ホップ栽培
32. コケ、キノコ、シダ類	67. 熊	102. ビール醸造
33. ミミズ、這う虫	68. げっ歯類	103. 亜麻と麻の栽培

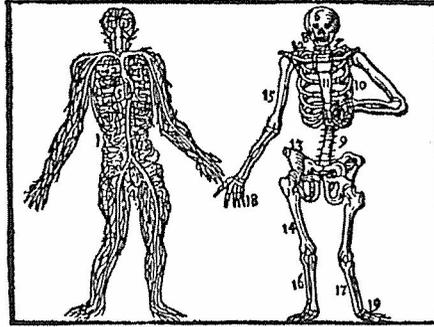
- | | | |
|---------------|----------------|--------------------|
| 104. 亜麻布 | 140. 軍用船 | 176. 陶工 |
| 105. 家事 | 141. 軍用船（続き） | 177. 蹄鉄工、釘製造人 |
| 106. まき割りと脱穀 | 142. 難破 | 178. 刃物師 |
| 107. 織物 | 143. 真珠貝漁業 | 179. 銅細工師 |
| 108. 羊毛織り | 144. 捕鯨 | 180. 錠前師 |
| 109. 羊毛織り（続き） | 145. 都市 | 181. コンパス、工具、拍車製造 |
| 110. 綿織物 | 146. 都市の内部 | 182. ブリキ職人 |
| 111. 絹織物 | 147. 王国と地方 | 183. 錫の鋳物工 |
| 112. 帽子作り | 148. 宮廷 | 184. 真鍮細工師 |
| 113. 機械 | 149. 兵士 | 185. 鐘づくり職人 |
| 114. 製粉 | 150. 兵士（続き） | 186. 貨幣製造 |
| 115. 製材 | 151. 戦闘 | 187. 刃物師と鉄砲鍛冶 |
| 116. 油の調合 | 152. 海戦 | 188. ベルト金属職人と留め具職人 |
| 117. タバコ製造 | 153. 鼓笛手 | 189. 縁飾り職人とボタン職人 |
| 118. 砂糖製造 | 154. 野営 | 190. 靴下職人 |
| 119. 鉱山 | 155. 軍務 | 191. 石鹼製造職人 |
| 120. 製塩 | 156. 要塞 | 192. 染め物師 |
| 121. パン製造 | 157. 工兵 | 193. なめし皮業者 |
| 122. 肉屋 | 158. 砲兵 | 194. なめし皮業者（続き） |
| 123. 料理 | 159. 包囲攻撃 | 195. 綱づくり人と馬具屋 |
| 124. 食事 | 160. 古代ローマ軍の凱旋 | 196. 毛皮業者とカバン製造職人 |
| 125. 仕立屋 | 161. 統治 | 197. 帽子と羽飾り製造職人 |
| 126. 靴屋 | 162. 犯罪者の身体刑 | 198. かつら製造職人 |
| 127. 大工 | 163. 計測と計量 | 199. にかわ製造職人 |
| 128. 左官 | 164. 商人 | 200. 石膏づくり |
| 129. 家 | 165. 時計 | 201. ブラシ製造職人 |
| 130. 家の部分 | 166. 時計職人 | 202. くし職人と傘職人 |
| 131. 馬丁 | 167. 画家 | 203. 宝石彫刻師と火打石師 |
| 132. 井戸 | 168. 彫塑家、彫刻家 | 204. ふるい職人と帽子箱職人 |
| 133. 旅人 | 169. ガラス製造 | 205. かご職人と麦わら帽職人 |
| 134. 馬に乗る人 | 170. ガラス工 | 206. 屋根ふき職人 |
| 135. 車大工 | 171. 火薬製造 | 207. 型づくり職人 |
| 136. 荷馬車 | 172. レンガ製造 | 208. 鏡づくり |
| 137. 水上輸送 | 173. 指物師 | 209. 陶器づくり |
| 138. 船 | 174. ろくろ師 | 210. パイプづくり |
| 139. 貨物船 | 175. 樽職人 | 211. 木炭づくり |

- | | | |
|-----------------|----------------|-------------------|
| 212. 松ヤニと樹脂づくり | 248. ドイツ | 284. 雷と地震 |
| 213. ブランデー類製造業者 | 249. オルガン奏者 | 285. 煙突掃除人 |
| 214. リンゴ酒と酢の製造 | 250. 聖歌隊と教会の人 | 286. 水浴 |
| 215. レーブクーヘンづくり | 251. 聖職者 | 287. 蒸気船 |
| 216. 飲み物づくり | 252. 自然宗教 | 288. 鏡と眼鏡 |
| 217. 料理人 | 253. 異教 | 289. 大滝 |
| 218. 料理人(続き) | 254. ユダヤ教 | 290. 氷河となだれ |
| 219. 食堂の主人 | 255. マホメット教 | 291. ヴェスヴィアス火山 |
| 220. 砂糖とクッキー類 | 256. キリスト教 | 292. オーロラ |
| 221. ホテル | 257. 倫理学 | 293. エンゲルス城と橋の風景 |
| 222. 居酒屋 | 258. 英知 | 294. ローマの聖ペテロ教会 |
| 223. 機械技師 | 259. 勤勉 | 295. シュトラスブルクの大聖堂 |
| 224. 金と銀の細工師 | 260. 節制 | 296. 鉄道と蒸気機関車 |
| 225. 楽器製造業者 | 261. 勇気 | 297. 釣鐘式潜水器 |
| 226. 紙 | 262. 忍耐 | 298. ニシン漁 |
| 227. 紙(続き) | 263. 人間性と誠実 | 299. 日食と月食 |
| 228. 書法 | 264. 正義と正直 | 300. 奴隷売買 |
| 229. 印刷術 | 265. 気前の良さと儉約 | 301. ピラミッドと記念塔 |
| 230. 銅版印刷と石版印刷 | 266. 公共の慈善施設 | 302. 有名な洞窟 |
| 231. 本屋と司書 | 267. 結婚 | 303. 電報 |
| 232. 製本屋 | 268. 両親 | 304. 馬上試合 |
| 233. 医者と薬剤師 | 269. 主人 | 305. 隠遁者 |
| 234. 外科医と理髪師 | 270. 子どもの遊び | 306. 修道院 |
| 235. 法律家 | 271. 社交的な遊び | 307. 五月祭 |
| 236. 伝道者 | 272. 大衆の遊び | 308. クリスマスと復活祭 |
| 237. 学校 | 273. 演劇 | 309. 幾何学と建築学 |
| 238. 大学 | 274. 綱渡りと手品師 | 310. カレンダー |
| 239. 文法と雄弁術 | 275. フェンシングの剣士 | 311. 鍛冶屋、鋳物場 |
| 240. 書齋 | 276. ダンスの踊り手 | 312. やすりづくり |
| 241. 哲学 | 277. 気球 | 313. じゅうたん製造 |
| 242. 数学 | 278. 花火師 | 314. 御者、夜警、畑の番人 |
| 243. 天球儀 | 279. 船上の争い | 315. 郵便配達人とポスト |
| 244. 恒星 | 280. 古代ローマの競技場 | 316. 死と埋葬 |
| 245. 惑星と彗星 | 281. スペインの闘牛 | 教師の別れの挨拶 |
| 246. 平射図法 | 282. イギリスの競馬 | |
| 247. ヨーロッパ | 283. 火事と洪水 | |

『世界図絵』と『新・世界図絵』の比較

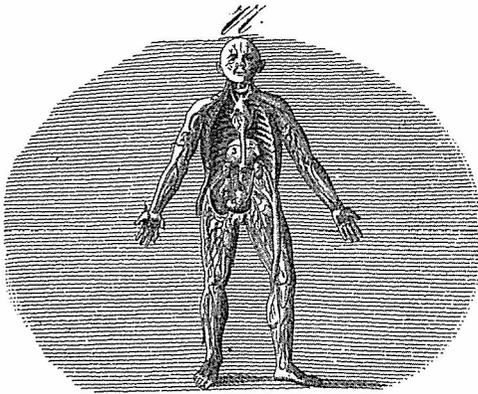
著 者	コメニウス	ガイラー	ガイラー	ガイラー	ガイラー	ガイラー
書 名	世界図絵	新・ 世界図絵	新・ 世界図絵	新・ 世界図絵	新・ 世界図絵	新・ 世界図絵
版 数	初 版	初 版	第 2 版	第 3 版	第 4 版	第 5 版
発 行 年	1658年	1832年	1833年	1835年	1838年	1842年
章 の 数	150	316	320	320	320	320
使用言語	ラテン語 ドイツ語	ラテン語 ドイツ語 フランス語	ラテン語 ドイツ語 フランス語	ラテン語 ドイツ語 フランス語 英 語	ラテン語 ドイツ語 フランス語 英 語	ラテン語 ドイツ語 フランス語 英 語 イタリア語
本文中の言葉と挿絵の中の数字との対応	すべての章	60章以上	60章以上	60章以上	60章以上	60章以上

(改訂された点をゴシックで示した)



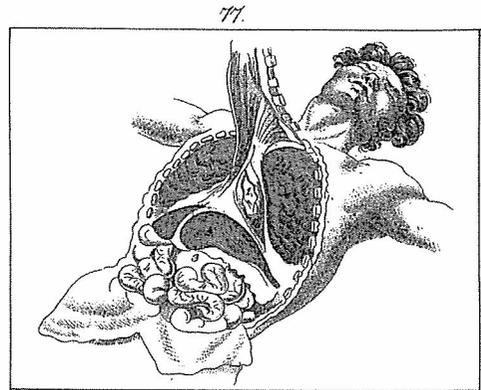
『世界図絵』1658年版

40. 脈管と骨格

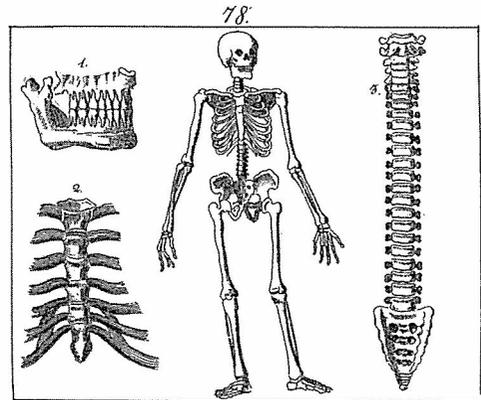
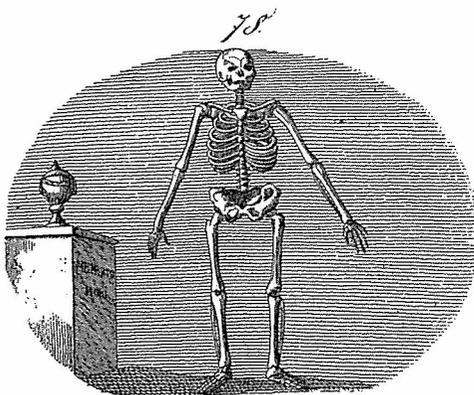


『新・世界図絵』1832年版

77. 人体の内部



1, Die Lunge, 2, Die Speiseröhre, 3, Der Magen, 4, Die Gekrümme, 5, Die Leber.



1, Ober- und Unterkiefer, 2, Das Brustbein, 3, Die Rückenmark.

『新・世界図絵』1835年版

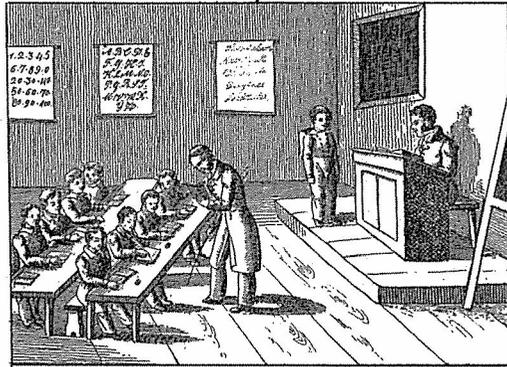
77. 人体の内部



『世界図絵』1658年版

97. 学校

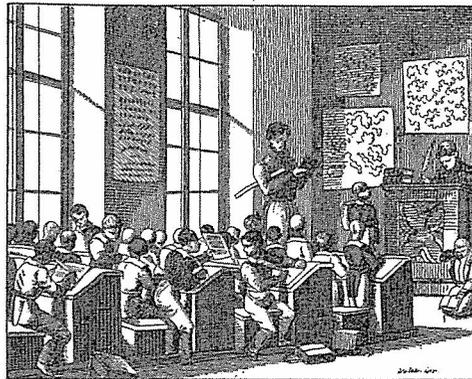
237.



『新・世界図絵』1832年版

237. 学校

237.



『新・世界図絵』1835年版

237. 学校



『世界図絵』1658年版

111. 勤勉

250.



『新・世界図絵』1832年版

259. 勤勉

250.



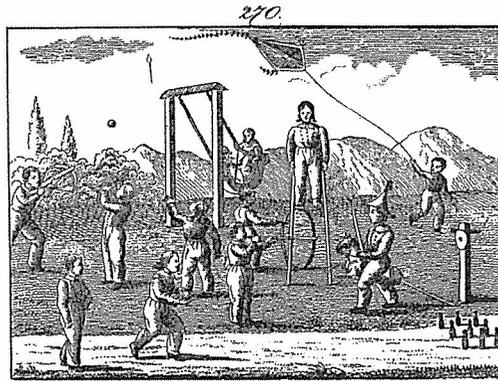
『新・世界図絵』1835年版

259. 勤勉



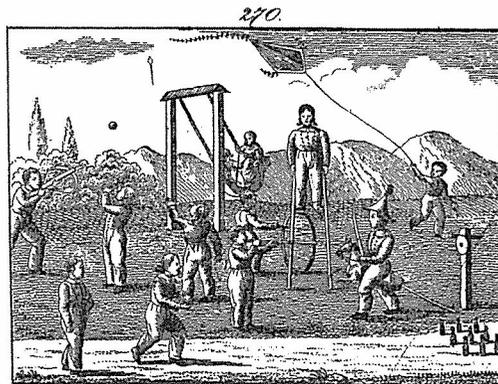
『世界図絵』1658年版

136. 少年の遊び



『新・世界図絵』1832年版

270. 子どもの遊び



『新・世界図絵』1835年版

270. 子どもの遊び